

第九章 植 物

第一節 長洲町における植物考

一、植物について

地球上には四十万種を越す植物があるといわれている。その起りは単一のもの（ラン藻類）から分化し進化を重ねて現在の姿になったものと云われている。水中に在った原始植物が陸上に根づくまで十数億年という気の遠くなる様な進化の努力がかさねられたのである。その植物は葉緑素を持っており光合成その他の働きによって動物（人類も含む）や生物植物にエネルギーを供給しており、これなくしては人類は勿論すべての生物の生存は考えられないほど重要なものである。

また、生物はすべて栄養、すなわち食物を必要とするが、それは植物を基礎とした食物連鎖により生存している。

註 食物連鎖とは、動物の相互共存の「システム」であり甲が乙を捕食し乙は丙をたべ強いものが弱いものをたべることで動物相互の生存を可能にし生態系が維持されている食物攝取の状態である。

人類は植物を食料とし、あるいは、生活用具・住居・衣料・燃料・等々あらゆるものを生存のために利用しておりその恩恵は計り知れないものである。

地球上の遠い／＼昔（二十数億年前と云われる）水中植物である藻が現れそれが進化と分化を重ねて陸上植物となり、長い年代を重ねて石炭その他の地下資源の原料となり、水と共に動物生存の条件である緑の地球が築かれたのであり動物発生のはるか以前のことである。

その植物には細菌性のものや「コケ」の仲間、太古の植物界の主役であった「シダ」類や種子を造りそれから生える顕化植物等いろいろの種類の種類があり日本で判明しているものが四千種以上あるという。

平和そのものに見える植物界にも興亡盛衰があり激しい生存競争が行われている。それは地球の気象の大変化（氷河期のような寒冷化や太陽黒点の変化による温暖化やそれらに伴なう海進海退現象等）や火山の噴火や地震によるもの・台風や津波・大洪水・大干魃・害虫の大発生、人間による侵害（焼畑農業や薪炭、食料・住居、その他の用に供するため）その他いろいろの災害に対応し順応し得た植物のみが生々發展してゆくのである。

参考事項

寛政の大津波でそれまで美しい松林であった長洲海岸の防潮松が全滅に近い被害を受けたとの古老の云い伝えがある。又日立造船工場造成時の九州大学の調査によると、弥生時代末期に（約二〇〇〇年前）それ以上に大きな津波の爪跡が姫ヶ浦の地層に残されていることが記録されている。

日本の植物圏の区分によれば長洲町は「シナ日本区」のうち「ソハヤキ地区」九州中部・瀬戸内海沿岸帯

から近畿地方南部に至る地域に属し、中華人民共和国の中部と最も類似した植物園にあり、シイ、タブ、クス、カシ、等の常緑広葉樹や、エノキ、ムク等の落葉樹や、松や杉の針葉樹や、ムベ、ビナンカヅラ、その他のつる性のもの、シダ類、ラン科、イネ科、キク科、ききょう科、しそ科、くまつづら科、ひるがお科、等々多岐にわたって自生しており内陸植物から海浜植物、さらに海外からの輸入植物、侵入植物（渡り鳥により、また潮流により、人の手により、又は輸入品に附着して）も多数見られる「ソハヤキ地区」の平均的な植物分布地域であり、温暖な気候と適当な降雨に恵まれた植物環境の地帯である。

註 「ソハヤキ」地区とは、南九州の古名である「饗の国」の「ソ」と「速吸の瀬戸」の頭文字である「ハヤ」及び「紀伊の国の「キ」を組合せたもの

（参考事項）

大正十二年刊玉名郡誌の記録に日本の全植物を約三、〇〇〇種として挙げてあり、玉名郡内に自生または植栽されている植物が一、五五二種あると記録されている。長洲町の植物もそれに近い調査結果が得られる筈である。

二、松の絶滅と帰化植物

終戦前後から昭和五十年期にかけて当町で植物界に大きな変動が見られた。

それは、松、（マツ科マツ属）特に黒松（自生自然のもの）の絶滅である。

針葉樹である松は、種子植物では初期に出現した植物であり、自然の適応力にすぐれており順調に育てば

千年の齢をも保ち得る強壯な樹木である。

松の葉はそれ／＼の一本一本が一つの単位となり炭酸ガスから糖をつくり出しており、形は三角形（断面）で長さは十センチメートル前後、中央に葉脈があり水と養分をはこぶ仮導管と、溶けた糖分を他の部分に運ぶ篩管（さいかん）がある、その外に養分をつくる葉肉と、傷を治す樹脂とをはこぶ管があり、それらが丈夫な膜によって保護されている。

当町の自生松は「小岱松」（小岱山系の荒尾市及び長洲町で荒尾郷と稱した地域の松）と呼ばれ荒皮性の幹模様と葉の黄緑が鮮やかな名松であり、特に盆栽界では全国的に知られている。

絶滅の原因の一つは戦時中「松根油」（航空燃料その他軍用に供したという）の採取である。樹令数百年、目通し二メートルや三メートルの大木は神社仏閣をはじめ各所に在ったが大木ほど油が取れるところから「Y字型」に皮肌を傷つけられ養分を流し取られて衰弱の果て枯れていった。戦争の犠牲は松にも及んだのである。

その次は「松喰虫」の大流行である。それは戦後の荒廃を象徴する様な惨憺たる松山の姿であった、当町に於ける山林の主体は松であり、小岱山系の府本から八幡を経て一先台地に至る丘陵の赤茶けた松山の姿はまことに寒々としたものであった、

そして農業構造改善事業による松山の密柑畑化がすすむにつれ、ほとんどの松山が姿を消した。

歯の抜けたように生き残った松は二度、三度に亘り松喰虫の集中攻撃を受けて絶滅したのである。

日本の植物界の王者であり風景の主役である松は長洲町の松と似たような経過を経て絶滅の危機にある。

最大のピークは

昭和五十四年度——二四三万立方メートル

昭和五十九年度——一二〇万立方メートル（株数——六五五万株）

昭和六十年年度——一二六万立方メートル

この大きな松喰虫の被害を残して、南から北へと波状攻撃を加えているのである。

松喰虫の正体である「マダラカミキリ虫」を媒介する「マツノザイセン虫」の解明が成され予防が可能となったが薬害その他の事情により思うにまかせないのが現状である。因に日本人の松に対する郷愁に似た思いは強く、以前の「神の宿る木」とされた信仰は消えているが「姓名」に松を冠するものは、松田、松本、松山、等数十に及んでいる、又緑化用苗木として現在も大きな需要があり「カイヅカイブキ」に次いで第二位である。

松の衰えと時を同じくして特異な現象がおきた。大戦終了後、連合軍によって日本が占領され、軍人とそれに伴う物資はほとんどがアメリカから洪水のようにせまい日本に流れこんできたのであるが「招かざる客」それは「キク科」の植物「セイタカアワダチソウ」の侵入である。帰化植物と云うには余りにも急であった、日本の空き地という空地は「アツ」という間にこの草に埋めつくされた。

北米原産で荒地に強く群生して高さは二メートルに達し根は強く土に食いこみ「くき」は強靱で伝播力がつよく在来の植物を押しつけて繁茂した。「イネ科」の「ススキ」や「キク科」の「ヨモギ」に替わってわがものの顔に茂っているのはこの草である。「セイタカアワダチソウ」の利用については研究もされている

ようであるが、現在のところ利用価値は零である、然もこの侵入者は「花粉公害」まで撒きちらしている。またたく間に日本の湖沼（特に西日本）の水草を制し嫌われたものとなった「ホテイアオイ」（ミズアオイ科ホテイアオイ属＝熱帯原産）は水の浄化に役立つだけにこの草よりまだましであった。

三、防潮堤構築による植物への影響

有明海は潮流その他の原因により島原半島側は侵食されつゝあり、熊本県側は土砂の推積を重ねているといふ。

昔の海岸（三、四十年前以前）は荒尾市から長洲町を経て岱明に至る間、見渡すかぎり白い砂浜がつづいていた。吾々は海岸とは砂浜であると思つて成長したものである。

防潮と防風には慶長の築堤（古塘・菜切・塩屋・の第一期堤防）以来松林の造成と補植に努めて来たのであるが、護岸堤防の構築が決定して、昭和三十五年から三十六年にかけて施行され九州地方では希な長い砂浜は消え去つたのである。

この堤防の構築により海岸一帯の植物界にも大きな影響を与えた。堤防構築前に多く見られた植物で

ハマヒルガオ、	ハマボウフウ、	ハマエンドウ、	ハマニガナ、	ハマダイコン、
メドハギ、	オガルカセ、	ハマハタザオ、	フシグロ、	カワラサイコ、
ハマタマボウキ、	マツヨイグサ、	イトラン、	キミガヨラン	ハマナツメ、

等の植物は堤防構築の影響により激減した。特に、ハマタマボウキ、ハマナツメ、の二種は完全に姿を消している。

昭和十三年には防潮防風林再生が叫ばれて海岸一帯に黒松が植えられた、それが成長するにつれて防風林内の植物も変わりはじめた。

トキワススキ、オニシバ

が生え初めた。それにつづいて

チガヤ、 テタハノイバラ、 マサキ、 ナワシログミ、 クスドイゲ、 ビワ、

アメリカシワ、 センダン、 ネズミモチ

などの海浜植物でない植物が姿を見せはじめた、然し堤防の前面に残った砂浜には

ハマゴウ、 ハマヒルガオ、 ケカモノハシ、 コウボウムギ、 ハマニガナ

などは従前とかわりなく生きつづけていた

海岸一帯の植物相

当町の新山墓地一帯は特異な植物相を備えた地域である。

エノキ、センダン、マサキ

などが茂っており

キズタ、リウノヒゲ、ヤブラン

までが生えている。これはふるくから松林となっていた為かと思われる。

昭和三十五年から六年にかけて前記のように護岸防潮堤が構築されたが、それよりこの地一帯の植物に大きな影響が見られた。

昭和五十七年四月までに調査したところによると、

ニワホコリ、カタバミ、トウダイグサ、フラサバソウ、ノケシ

などの浜辺でない所に生えている植物（海浜植物でないもの）がむしろ主流となって栄えはじめた。それとともに、

ボウムギ、イヌムギ、ヒゲナガスズメ

などの帰化植物の侵入が目立ってきた。

これらはどの様な経過で侵入したのかわからない、

荒尾市から長洲町にかけて残っている砂浜では

マツヨイグサ、イヌノフグリ、ケカモノハシ、ツルナ、ハマボオフラ、

ハマヒルガオ、ハマゴウ

などの海浜植物が定着しているがこれらの植物は荒尾市の牛水方面に茂っている、そして牛水下から長洲町にかけては帰化植物の侵入が見られその定着が目立っている。

またずっと南に寄った浦川と菜切川の水門の近く（新塘姫ヶ浦附近）には、

ハマサジ、ホソバノハマアカザ

等の姿が見られる。

絶滅したのか、探しても見ることが困難となった植物には

オニシバ、 コウボウムギ、 ハマタマボウキ、 ハマハタザオ、 カワラサイコ、

ルリハッカ、 ハマニガナ

などがあり、これらはこの海岸から姿を消したのかもしれない。

最後に終戦前後から現在まで（昭和五十八年）に侵入してきた帰化植物には次のようなものがある。

- 1、イヌムギ 2、キシウスズメノヒエ 3、ネズミムギ 4、ヒゲナガスズメノチヤ
- 5、ボウムギ 6、コアカザ 7、ナガミヒナゲシ 8、カラクサナズナ 9、コシナガワハギ
- 10、アメリカフウロ 11、イモカタバミ 12、アレチマツヨイグサ 13、コマツヨイグサ
- 14、オオイヌイフグリ 15、フラサバソウ

等々数多くの帰化植物が見られ、その交流のはげしさに驚かされる。

おこわり

この項は

荒尾市牛水上、故 隅倉清義教諭が長年に亘り研究観察された記録の一部を提供されたものを参照した、こころよく資料の提供をされた隅倉氏の御夫人に感謝するものである。

四、長洲町植物の地理的考察

長洲町は三つの植物帯に分類することができる。

その一は

小岱山系の延長台地とも云うべき地帯であり、荒尾市と当町の東北部境界から「鷺の巣」、「高田」、「折崎」につらなる丘陵であり、境界から南に約二キロメートルあまり伸びており、最南端部は「折崎」の「老人憩の家」附近まで達している。平均高度は「二十メートル」強で北端最高部で「三十八、五メートル」あり長洲町のヒマラヤ地帯である。

また、この丘陵と併行して「荒尾赤田」から「長洲赤田」を経て一先台地を形成しつつ「蓮の池」附近まで連なっている台地

以上の丘陵一帯とその周辺である。

この地域一帯は「二、三十年」前までは荒尾市府本小学校附近と共に「大松山」を形成していたが、松の絶滅によりその樹相は一変して主役の居ない群雄割拠の状態である。

この地帯で目立って多いのは「シイノキ」（ブナ科）がある。所々に大木があり向野の附近まで及んでいる。「タブ」や「クスノキ」（クスノキ科）や「クロガネモチ」、「イヌツゲ」、「マサキ」（モチノキ科）それに「ヤマモモ」、「カシ」も多くそのほかの落葉高木等々あり雑多な植物で構成されている。

「クロガネモチ」、「イヌツゲ」や「モツコク」（ツバキ科）などは庭園木として珍重されるため、掘り取られ眼にすることが少なくなっている、最近では「ヤマモモ」から「クスノキ」まで庭園樹の対象となつて森から姿を消している。

赤田附近に多数見られた「ヤマツツジ」は素朴な色彩をもった独得の「ツツジ」であるが現在はその姿は

見られない。宮野から永方北部を通り「立野」「葛輪」を経て赤田に至る一先台地の松山は「農業構造改善事業」により「みかん山」となり、まとまった山林は無くなった、そして人家の増加により宅地化しており、旧態は見られない。然し北部荒尾市との境界近くには自然林の形態が残っている。

その二は

梅田、高浜から、永塩、宮野、平原、清源寺から、折崎、腹赤をむすぶ地帯であり、この地域は長洲町に干拓の手が及ばなかった時代の海岸線を形成していた一帯である。

これ等の地域は古くから集落が存在していたところであり「山林」と云うべき地帯はない。「鎮守の森」と「雑木林」があるのみである。この地域もかつては「松」が主体で樹林が形成されていたが現在は広葉樹や落葉樹が栄えている。

野原や空地には「セイタカアワダチソウ」を初め外来植物も多く見られ「セイヨウタンポポ」(ヨーロッパ原産)が在来種以上に多いのは「薬用」(胃腸薬)に供した名残であろう。また小さな草の「ニワセキシヨウ」(北アメリカ原産)が多いのは一つの謎である。

梅田の西端にある「伝兵衛山」の西側斜面は「ヤマモモ」「タブノキ」「モッコク」などの大木が林立繁茂しており、この地帯では珍しい密林になっている。同地の「山本一夫」氏宅の西側にある「モッコク」は目通し二メートル以上ある大木である。

永方の信定寺の西側にある「広葉樹林」(二二九八平方メートル)は「ホルトノキ」をはじめ古木が茂っており「サザンカ」(ツバキ科ツバキ属)の老木が多数見られ「イスノキ」「ヤブツバキ」「ヤブニッケイ」「ク

ロキ」「ムクノキ」「アラガシ」などの樹木や「ノシラン」「リウノヒゲ」「イタチシダ」「トラノオ」「ノキシノブ」等の野草も茂っている。荒尾市府本在住の植物学者、荒尾宏氏もこの地の重要さを荒尾宏植物調査報第三九号「長洲町にあるホルトノキ群」に於て指摘し、調査を要することを記している。

この地周辺で特に多いのは「ツバキ」であり、「ツバキ油」は生活必需品であつたものと思われる。その三は

旧長洲町の新山墓地から新塘、姫ヶ浦を経て平原、清源寺そして沖の洲を結ぶ地域であり、この一帯は有明海の海退現象と寛永以来営々とつゞけられた干拓により造成された地域である。

寛永の築堤以来防潮風を目的とした松林の植林が続けられた所である、現在の中学校附近を長洲山と云い「松原町」と云う名が残されている通り老松が立ちならび壯觀を呈していたが、初期の老大木は枯れ絶えている。しかし、大正初期以来補植されたものが「新山の松林」となり、「姫ヶ浦の松並木」とともにこの町の景観となつて成長している。

神社や仏閣には創建時からの老木が保護されており、特に「四王子神社」と「名石神社」には多数の老木があり無言の歴史をとどめている。

清源寺と沖の洲間の堤防道路には封建時代の重要な奨励産業となつていた「ハゼ」の木の老大木が数多く見られたが今は残り少なくなっている。

雑木類や野草類は「海浜植物」やそうでない植物に混じつて外来の植物も多く定着しており、これ等は潮流に運ばれて来たものと思われる。

第二節 町木、町花

昭和六十年度に「町木・町花」の選定委員会が設けられ、アンケートによって全町民から寄せられた「候補木・候補花」の結果をもとに「町木・町花」を町長に答申して次のように定められた。

一、町木、「クロガネモチ」（モチノキ科）

この樹は関東以西に自生しており中華人民共和国の暖帯地方から亜熱帯地方にかけて分布している広葉高木である。

当町周辺ではふつう「モチノキ」と云われている。

熊本県北部に最も多く特に「荒尾市」と「長洲町」に自生している。

古来庭木や観賞木として広く愛好されておりその為に「自生木」は漸減している。この樹には、雌雄があり、雌木には赤色の果実をつけ、雄木は花のみで着果しないので「カラモチ」とも云う。又異種として黄色の果実をつけるものを「黄金モチ」と云い、白色の果実をつけるものを「白金モチ」とも云う。

当町には庭園樹として数多く植栽されており、古木、銘木も多いが個人所有のものは省略する。次の二樹は是非紹介しておきたい名木である。

1、所在地 長洲町大字折崎

折地稲荷神社境内

樹種 クロガネモチ 雄木

目通 一メートル九二センチ

根廻 三メートル二〇センチ

樹高 一四メートル

枝張 東西、南北、共に一〇メートル

2、所在地 長洲町大字永塩字赤月八七二赤田区内

所有者 大蔵省

原野となっており、昔「いずもりさん」という社の跡地であり広さは一一四平方メートル

樹種 クロガネモチ 雌木 赤実

目通 一メートル六五センチ

根廻 二メートル六十センチ

樹高 一六メートル

枝張 東西、南北、共に十二メートル

赤田区民の努力により小公園として整備され威容をほこっている。

3、天皇在位六十周年記念植樹

長洲町大字清源寺で代々医を業とした旧家の合志家より、同家に伝えられた雌雄両木の「クロガネモチ」の木を今上天皇在位六十周年を記念して「長洲町」及び町民に寄贈された。経過は次の通りである。

昭和六十一年五月十六日

合志家代表 福山津也氏

長洲町代表 宮田靖次町長

福山氏より、宮田町長に「クロガネモチ」二株の贈呈が行われ、直ちに「長洲町文化センター」前に植樹された。

両木は共に樹齡二百年を越す古木と推定される名木である。

二、町 花

キンギョ草、コノハグサ科キンギョソウ属南ヨーロッパ原産

花の形が「キンギョ」に似ているところからこの名がある。多年草であり、江戸時代末期に渡来した帰化植物である。

自然開花は四月から六月であるが種まきの時期をずらしていけば初冬の頃までひらく。

この花を「町の花」とする町民の推薦が最も多く、金魚に対するあつい思いが感ぜられた。附記、町木「モチノキ」の個人所有の大、古木に関する記録は「役場企画課」にある。

第三節 長洲町指定天然記念物

一、天神さんの玉藤

所在地 長洲町大字梅田 天満宮境内

樹種 フジ、マメ科フジ属

通称 「天神さんの玉藤」と云われており

「この社が鎮座以来のものと云う」との古老の云い伝えがあり、明治初年には既に現在の樹容を備えていたと云う。

註 藤は老樹になれば表皮に腐蝕を起して欠落することが多いので「大きいから古い」と云う訳ではないことがある。

今の樹幹は旧幹が枯死したのち根株から新生したと思われその根跡が認められる。

昭和八年に「天然記念物」として文部省から指定を受けたが、戦争とその後の清里村の分村などの為その記録は一切失われている。現在この天満宮境内に大小九株の老藤があり年々衰弱して花房が短小になりつつあったが、昭和五十三年に町指定天然記念物となり藤棚の設置や地区住民の手による施肥等により徐々に樹勢の回復が見られつつあるものの、一層の保護が必要である。

尚玉藤と云う名稱の由来は、垂下した花房の下部が粒状になり花の下に玉を並べた様な形を呈するのでそ

の名があった。花の満開時には地域の子供が集まり「玉藤」を投げ合って「玉藤合戦」をしていたという。

現在は「玉藤」の状態は見られない。その理由については「樹勢が衰えたから」「老化が原因」などとも言われ明確ではないが一説によると、この天満宮の周辺に「穴蜂」が群生しており、その蜂が開花前の花の養分を吸いとるの栄養不良の状態となり固化していた、との説もある。もし後者であれば消毒剤の普及その他の原因で蜂がいなくなり玉藤にならなくなったのであろう。

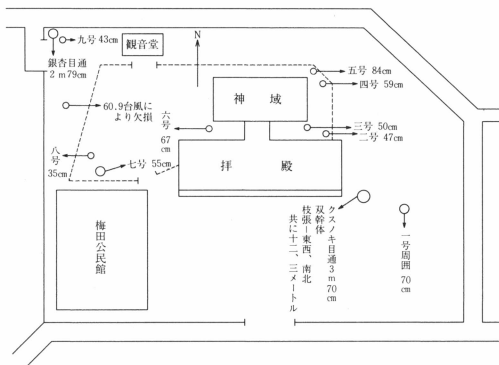
附記 昭和六十年九月の台風十三号により樹木が倒れ支え木を失った藤一株が欠落した。

この社の拝殿右側に「クスノキ」の太木があり高浜の「二宮八幡宮」の「大楠」に次ぐ太木であり「おだやかな」樹相の樹であり社の古さをしのばせる。

二、六栄小学校々庭の櫟

所在地 長洲町立六栄小学校々庭

長洲町指定天然記念物、玉藤群配置図
昭和六十一年六月十一日調



樹種 ケヤキ、ニレ科ケヤキ属

落葉高木で本州から九州の高地に自生する。觀賞木或いは建築用の高級材として使用する。

樹齡 八十年以上

樹高 二十二メートル

目通 三メートル三十センチ

根廻 五メートル三三センチ

枝張 東西——十五メートル、南北——十四メートル

当時の六栄村永方出身の故築地宜雄氏が明治末年に「長野蚕糸専門学校」開校にあたり教授として招請されて勤務中、長野県より当地に移し植えたものである。築地家には、同時に移し植えられた兄弟木がある。

「ケヤキ」は直立して分枝多く、所謂「箒立状」の樹形となるのが理想樹形である。この樹は成木を移し植えたものと思われるが移植後八十年前後で大木となりこのような見事な樹形を造って繁茂しているのは天成の名木であろうが驚異に値する。この地がこの樹に最も適合した立地条件を備えているのであろう。このことは、永方の築地家に在る「兄弟樹」と比較すれば一目瞭然である。

「植物が環境により、その發育と成長にどれほどの差異を生ずるか」のよき見本であり、教育資料ともなるものと思われる。

昭和五十六年・七年頃に樹勢が落ち憂うべき状態となっていたが、薬剤の散布と適当な施肥と共に、周囲に柵を設け根の露出部分を山砂で被い保護して周囲を花畑として立入を規制するなどの学校の配慮と努力が

あり見事に立直った。

昭和六十一年度に「長洲町天然記念物」第二号として指定されたが、六栄地区の「心のふるさと」的存在となつているこの名木を大切に育てたいものである。

第四節 みどりの長洲

一、新山黒松林

長洲の海浜は古名を「千鳥ヶ浜」と呼び白砂青松の景勝の浜であつた。

肥後国誌に「長洲の古塘は慶長十一年に築き松山は全十三年に植う」とあり、現在の長洲中学校や新興住宅地附近の小丘を長洲山と呼び、この一帯から旧墓地を経て「松原町」新山から新塘にかけて波風にもまれた「老松」の立ちならぶ見事な松林であつた。

この松林は慶長年間の古塘構築と共に防潮防風林造成を兼ねて肥後北辺の守りとして海上よりの侵攻に対する要害（兵隠し）として植えられたものという。その後島原大津波などによる被害を受けたが補植につため「昭和初期」まではその面影が残つていた。（墓地の北側鉄路脇に逆三角形型の老松があり常時「しめ縄」を張られ漁船の目標となつていた）

大正三年大正天皇の即位御大典記念事業として「防潮保安林」を兼ねて、景観の復活を目差して「青年団」



新山の松林

「婦人会」「長洲小学校高等科生徒」及び各町内の奉仕作業として黒松苗一万本が植えられ、同時に近在の松山からも多数の松が青年団の手に依つて移植されたという、その時国有地であつた一帯を払い下げて町有地となつたのである。

昭和十三年に再び新山から姫ヶ浦にかけて松苗一万本の補植が為された、然し翌昭和十四年には猛烈な台風による津波があり、その為補植された松は全滅に近い被害を受けた、その間この松林を常に見廻り献身的に見守つたのが全区の「区長」などをしていた「中島寅作翁」（故人）であつたと云う。

終戦後はこの海岸一帯に製塩場（私設塩浜）が乱立（戦後の混乱期の長洲町の経済の一半を支えた）があり、引続き「松喰虫」の被害があり受難の歴史をたどつた。

町役場による「松喰虫予防消毒」が初まり定期的に実施される様になつてようやく生き残つたのが現在の姿である。

所在地 長洲町大字長洲字新山

面積 三万平方メートル

總数 約二百五十株余

このうち第一回（大正三年ノ分）植樹の分と思われる松は「目通し」一メートル以上となり、三十数株が

見られる。

現状を維持して繁茂すれば県下有数の松林となり「長洲の落日」として県百景の一つとして名所であった昔日の名誉を回復するものと期待される。

二、防潮堤と防風林

かつては長洲町の「シンボル」であり住民と田畑の守護神であったのは護岸堤防であるが、開拓地の美田を守っていた雄姿は、新地の造成によりつぎ／＼に姿を消している。

所在地 長洲町大字清源寺（地番ナシ）

往時の姫ヶ浦海岸である。寛文四年に構築されてから文化、嘉永、安政、にかけて改修を重ね、安政四年（一八五七年）に、三十町四反、に余る製塩所が開かれた所であり、すぐ近くには明治期に「塩田倉庫」が在った所に「防潮堤」と「防潮堤上に植えられた防風林」が新地造成前の姿で残っている。

長さは約二百メートル余、黒松は「三十六株」あり、昭和十三年に防風林造成の為に植えられたものと思われる。

この新塘の姿は長洲町の記念碑として長く残したいものである。

三、「はまごいっ」の群生と黒松林

所在地 長洲町清源寺字浜口二八五の二、町有地

伝説の地、姫ヶ浦に在り、防潮堤を構築する以前の海岸では、土手を覆っていた「ハマゴウ」が昭和三十
五・六年以来めっきり少なくなり、工場造成干拓地の完成にともなつて全滅したものと思われていた。

昭和五十七年夏「町文化財保護委員会」の調査によりこの地に残存していることが確認された。

樹種、ハマゴウ、クマツヅラ科

落葉底木で浜辺の砂地に繁殖して地を這い分枝点から発根して次々に枝幹をのばす強い樹である。

晩夏から秋にかけて紫紺の花をつける。

東南アジア、南太平洋の諸島、オーストラリア、暖帯にかけて分布している。

長洲町に於ては唯一の自生地であるが、隣接する荒尾市大字牛水や岱明町の海岸にも残存している。

北上する暖流に運ばれてこの地に根づいたものであらう。

尚、この「ハマゴウ」は鳥取砂丘で数すくない植物として、又夏の花木として大切に保護されているとい
う。

「はまごう」の群生と共にこの地は旧腹赤村が「姫ヶ浦」の景観を復旧する為、「日露戦役記念防潮林」
として全村を挙げて明治末期に黒松約一万本を植えた地域の一部であり、その時の黒松が二十五株残ってい
る。最大のものは「目通し」一メートル二十センチあり樹勢は旺盛である。

この松林の中に、日露戦争の連合艦隊司令長官であつた東郷平八郎と明治の新政に功労のあつた岩倉具視
夫人の書による記念碑がある。

四、清里小学校植樹の概要

町立清里小学校は昭和三十六年に現在地に移転したが、移転新築後「環境の整備」に努め学校と地域の協力により短期間に学校緑化を成し遂げ、「文部大臣表彰」やその他数々の表彰を受けて、現在の様な見事な「教育環境」を造りあげた。

その概況を列記すれば

1、旧校舎（井上ゴムの敷地）より樹木の植え替え作業、PTA会員と学校職員の共同奉仕作業により約一ヶ月で完了。

2、植林計画の立案と庭園の設計を田主丸町内山緑地建設に依頼して樹木と苗木を購入、その費用約四万円はPTA会費及び校友会々費の積立金を充てた。

3、校区内の全家庭（PTA会員以外も）に一戸当り二株宛の寄附運動をした。
その時集ったのが「シユロ」「クロガネモチ」「黒松」などである。

校区と学校は「一体」である、との認識のもとに労力は全校区の「公役」として三地区交替の奉仕作業とした。

4、卒業生による記念樹の寄附

第一回卒業生の記念樹が校舎前の「メタセコイア」の並木である。

以上の経過をへて約三ヶ年で基礎を完了したが、その後も改善補植に努め昭和五十年頃には、ほぼ現在の

姿になった。このことは本校の当時の校長、田頭直氏（本町清源寺出身）の教育に対する熱意と献身的な奉仕が原動力であつた。

植樹されている主な樹種を列挙すれば

- | | | | | | | |
|----------|---------|----------|-----------|--------|----------|-------|
| 1、スギ | 2、サクラ | 3、バラ | 4、ネム | 5、シユロ | 6、シンバク | 7、ツゲ |
| 8、メタセコイア | 9、ツツジ | 10、フジ | 11、クロガネモチ | 12、ゲミ | 13、雪柳 | |
| 14、ギヨウリウ | 15、月桂樹 | 16、サツキ | 17、ビヤクシン | 18、ツバキ | 19、クチナシ | |
| 20、ヒイラギ | 21、ザクロ | 22、ヤツデ | 23、レンギョウ | 24、マキ | 25、泰山木 | |
| 26、赤松 | 27、黒松 | 28、ポプラ | 29、カナメモチ | 30、百日紅 | 31、フヨウ | 32、カシ |
| 33、モミヂ | 34、ケヤキ | 35、ニレケヤキ | 36、センダン | 37、ナツメ | 38、アメリカ松 | |
| 39、ニシキ木 | 40、ウメ | 41、タケ | 42、モクレン | 43、ハギ | 44、ニツケイ | |
| 45、ヤマモモ | 46、ギンナン | 47、サンショウ | 48、アラギリ | 49、サカキ | 50、ヒマラヤ杉 | |
| 51、サザンカ | 52、モクセイ | 53、ソテツ | 54、ユスラ梅 | 55、ビワ | 56、コブシ | |
- その他十数種あり

合計六十数種

總数—三百五十株

寄せ植え及び垣樹を併すれば数千に及ぶ

尚、樹木の手入れに付いてはPTAは勿論であるが、全校区内の老人会の奉仕により定期的に行われてお

学校と地域の結び付きと共に教育に対する理解にも役立っている。

五、「有明の森」と松並木と古大明神

1、有明の森

昭和四十八年に日立造船株式会社が当町に進出し、工場着工と共に工場内及び周辺の緑化に着手した。現行の「工場立地法」では緑化率二十%と定められているが、この立法以前の工場建設としては時代に先がけた構想であった、即ち森の中で船を造る計画として注目されたのである。

同社の方針によるとただに「社内環境の浄化」ではなく、「地域と工場との永遠の結びつき」を念願として一般町民にも開放する緑化地帯、とした所に特色を見るのである。

緑化地帯は全面積の七・四%、即ち

一一一九四四平方メートル

樹木總数は

高 木 一〇、九八三株

中 底 木 九三、七〇〇株

地被植物 三三、四三〇株

であり、世界の森、青年の森、安全の森、海外の森等と名付けられ県木、「クスノキ」を中心にそれぞれの森にふさわしい樹を配して、国内は勿論外国の珍木も多く植えられてその種類は「百数十種」あり、植物

者には「勉強の場」となり得る豊富さである。

この森の設計上の長所として推奨し得るのは、往時の長洲町の「シンボル」であつた新塘堤防上の松並木とそれに隣接する「長洲発祥の地」とも云われる「古大明神」の杜の三者を結び合わせ、「町の緑化計画」と併せて壮大な景色を造り出した点である。

明治神宮の森が全国からの奉仕と據出により造成され、六十年にして世界でも希な人工による自然林の形態がつくられたものとして有名であるが、この森の規模は小さくともそれに近い姿になるものと期待される。

2、新塘の松並木

長洲の碩学、月田蒙育が有名な

残月滴露濕人袂、晚風吹髮覺秋冷

忽見大蛇当道横、拔劍欲斬老松影

この詩は新塘の堤上で詩つたものという。

この松並木は「古大明神」の杜附近から「姫ヶ浦」にかけて昔の姿を再現すべく植えられたものであり、「新山の松林」の項で述べた大正三年の第一次植林と昭和十三年の第二次補植の混成樹林と見られる。

総数 約二百八十株

樹齢 七十年前後のものと四、五十年前後

目通 大なるものは一メートル以上のもの数十株あり。



松 並 木

場 所 長洲町長洲、四王子神社境内

一、四王子神社の大銀杏

第五節 古木・大木

参考事項 昭和六十年に新熊本百景の一つとしてこの地が選定された。



古大明神の杜

長洲町内に植えられている松林でこの一帯が、松喰虫の被害が最もすくないのは不思議であるが、元氣よく松は育つて幸せである。

往時の新塘の松並木が再現されつつあり。

3、古大明神の杜

長洲の氏神である「四王子神社」の故地に祠を祭り長洲町と企業が共同して「発展する長洲」の工場群の中の「いこいの場」を造り小公園として松を中心に植樹、「日立の森」と「松並木」と併せて大きな風景を目差して造成した「古大明神の杜」である。

以上の三者を併せて管理に努めているので成長見るべきものあり、海浜に希な人工の緑が成長している。

所有者 四王子神社

樹種 イチョウ、イチョウ科イチョウ属、

中国原産で中国音の「ヤーチヤオ」より転化した呼名、落葉高木で雌雄異株で最も古い層に属する植物で一科一種である、銀杏公孫樹又は鴨脚樹とも云う

目通 東幹三、〇〇メートル、西幹三、一〇メートル

根廻 五、九〇メートル、

枝張 東西十三メートル、南北十四メートル

樹高 十八メートル

六十年九月の台風により幹枝の欠損多く、樹勢回復中である。

双幹体であるがもとは三幹立ちであった。中央主幹は落雷の為欠損して今の姿になったという。

県指定「ふるさとの樹」に選定されている名木で希に見る老大木である、本社が永暦年間古大名神より転社以来のもの、と云いつたえられている。

尚、敷地北側に大ソテツ、があり、東側に在る「エノキ」は目通四メートルに及ぶ大木である、他に大榎や老銀杏があり、名石神社と共に「古、大木」の多い社である。

二、長洲小学校の大エノキ

場所 長洲町長洲、長洲小学校構内

枝 張 東西—十五メートル

南北—二五メートル



長洲小学校の榎

所有者 長洲町

樹 種 エノキ (ニレ科エノキ属)

ニレ科の落葉高木で江戸時代に一里塚に植えた、昔の街道筋に古木が残っている。概ねこの里程木である。

目 通 四メートル十五センチ

樹 高 十七メートル

樹齡は不明であるが雄大な樹容とそれにふさわしい樹勢がこの樹の特長であり、長洲に榎の大木は数多いが「ナンバーワン」はこの樹であろう。これは単幹で競争相手が居ないので、立地條件特に日光と風通しに恵まれている為かと思われる。古い枝の欠落箇所の補修を施せば、一層の樹勢向上が見られるところである。教育の現場に在る数少い大木であり貴重なものである。

三、永方のホルトノキ群

場 所 長洲町大字永塩一七六一
所有者 上野イチ氏



ホルトノキの古木

樹種 ホルトノキ、別名「モガシ」紀州では「ズクノキ」

と云う

尚、この地方の方言で「オバゼノキ」と云う

この地に大木が群生して長い間その樹名が判明せず、単に方言でオバゼノキと呼ばれていた。全地の越智文化財保護委員と荒尾市府本の植物学者「荒尾宏氏」の努力により解明された。この樹は九州地方から南西諸島にかけて分布しており、

その樹皮は大島つむぎの染料となる。この木の命名者は平賀源内であると云う。

枝葉は香料（線香）の最高の原料として使用されていたと伝えられているが現在では途絶えている。

ちなみに役場前通りの街路樹はこの樹であり「ヤマモモ」に似た鮮やかな葉をした立派な樹木である。

尚この「上野氏」宅の西北側に樹林がありホルトノキの大木と共に「ツバキ」「山茶花」の古木が群生している。

株数については「上野氏宅」周辺に六株あり、最大のもは「目通し二メートル五十センチ」あり、二メートルを越すものが四株ある。

四、古塘のエノキ

所在地 長洲町大字梅田（古塘提防）



千年連理の松

樹種 エノキ、ニレ科エノキ属

目通 二メートル一〇センチ

樹高 十六メートル

枝張 東西十五メートル、南北十四メートル

根廻 六メートル一〇センチ

古塘は慶長年間構築されたが、その時この堤防の根締めとして植えられたものと云う、その大きさよりも「古色蒼然」たる老樹であり「清正公さんの榎」と呼ばれ常に「しめ縄」が張ってあったものである。堤防

潮止めの石橋が消滅した現在干拓堤防の「シンボル」である。

五、黒 松

所在地 長洲町長洲一、三九八

所有者 千年俊雄

樹種 黒松 マツ科マツ属「オマツ」ともいう、朝鮮半島南部から本州

四国九州に自生する。

目通 七十センチメートル

樹高 三メートル三十センチ

文化十一年植樹との記録があり樹齢は「一七〇年」を越す老松である。

当町で百年以上の植物で記録がある珍重すべき樹である。松では稀な連理の枝となっている。
 註 「連理の枝」とは「枝と枝」或いは「枝と幹」が自然の状態で接合すること、夫婦の理想の姿をとえて云う。

六、沖洲名石神社境内の銀杏群

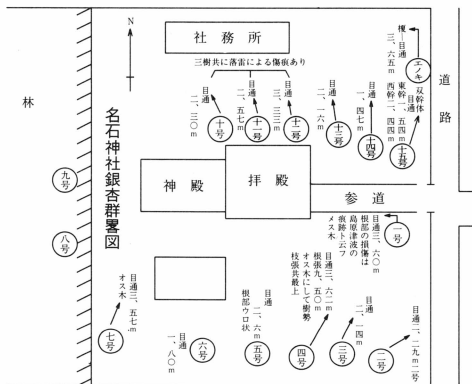
所在地 長洲町大字上沖洲

所有者 名石神社

樹種 目通しその他は別図に記載する。

幹及び枝葉は十五株の大木が相交錯して神社の境内全域を覆いつくして繁茂しており、特に夏場は鬱蒼たる日蔭をつくり「老人会」や「子供会」の避暑地となっている。

樹高は大小を問わず二十メートル前後である。樹齢は当社の陸社である「深田浦」から遷座した時植えられたとの口伝があるが、元和元年（一六一五）の遷座後に植えられたものであろう、その後寛政大津波の洗礼があり一号樹にはその傷が残っている。又新地の平野にそびえた大木の宿命で落雷にも数度となく見舞わ



れたと伝えられ、その傷痕の残っている樹も処々に見られる。

この社の樹木は銀杏は勿論「エノキ」その他も樹勢が盛んであり、特に銀杏の実成りは見事である。

附記 昭和六十年九月の十三号台風で枝折れ、その他大きな損傷が見られたが倒木はなく本年（六一年）は芽立ちもよく順調に回復している。

七、腹赤の大タブの木

所在地 長洲町大字腹赤一六六番地

所有者 坂崎昌一

樹種 タブノキ、クスノキ科タブノキ属

樹高 十九メートル

目通 八メートル三三センチ

根廻 十三メートル一〇センチ

枝張 東西、南北、共に十四メートル前後

根部は枯れ朽ちて「ウロ」状となり、幹部も折れ朽ちており死生の間を彷徨しつつ、尚生命を維持しつつけている様子は驚嘆に価する、昔は大本を計るには、大人が手を伸ばしつけないではかり「三人掛り」や「五人掛り」などと表現していたが、昭和初期には「十八名」を以てしても抱き得なかったと云う。昭和十四年に猛烈な台風により幹の上部と枝のほとんどが吹き折られたと云う（先代坂崎氏の生前の談話）現在の主幹

はその時の脇枝が伸びたものと思われる。

樹下は小丘となっており、古老の云い伝えによると、腹赤天満宮がこの地に在ったとも云う、現在はこの樹下に観音像を祀り地区の人によって祭りがつゞけられている。これは観音信仰か或いは「大木崇拜」の名残りが不明である。また、昔、「ハラカ」の港に出入りする舟の「目標木」であつたとの口伝もある。

八、二宮八幡宮のクスノキ「熊本県指定木」

所在地 長洲町大字高浜二宮八幡宮境内

所有者 八幡宮

樹種 クスノキ、クスノキ科クスノキ属
目通 四メートル五十センチ



二宮八幡宮大クス

樹高 二十一メートル

根廻 一〇メートル九五センチ

枝張 東西—十五メートル、南北—十八メートル

荒尾郷一の宮である野原の宮に次ぐ由緒ある二の宮にふさわしい名木である。熊本県指定「ふるさと熊本の樹木」として指定されている「四王子神社」の銀杏と共に長洲町の代表木である。昭和六十年先の鳥居を吹き倒した台風により枝は

折れ葉は全部吹き払われたが一年にして再生し、植物の生命力の強さを見せつけられた。

神殿後方は、目通、三メートル二十センチのクスノキがある。

亦、神殿に向って左側に

樹 種 イスノキ・（方言でヒヨウヒヨウグリ）と云う。

目 通 一メートル七五センチ

樹 高 十五メートル

がある。常緑低木であるこの種としては驚異的な大木である。この木は樹高三メートル前後が限度とされている。

根の張り具合いと云い樹容の古相と云い前述の大クスノキに劣らない古木である。

九、立浜の里程エノキ

所在地 長洲町大字高浜一、四六六

所有者 高野四郎

目 通 四メートル三十センチ

樹 高 二十メートル

根 廻 六メートル四十センチ

枝 張 東西、十六メートル、南北、十三メートル

昔の小話に、御家老が殿さまに「街道の目標に如何なる樹を植えましょうか」とお伺いした所、他のことに氣をとられていた殿は「え、の木を植えておけ」と、家老は「ハツ榎で」となったそう。

里程木に榎が選ばれたのはその「成長力」と強靱な生命力の故であろう。

この樹は江戸時代の里程木と云われ堂々たる威容である。特に根部の隆起は素晴らしいものがある。只この樹が道路脇のあまりにも近い所に生えている為、その将来が危懼きぐされるのである。

十、一先宮境内の小岱松

所在地 長洲町六栄一先宮境内

天下の名松「小岱松」の白眉は荒尾市の府本小学校附近と、この一先宮周辺の松であると云われて来た。然し殆んど松が枯死して往時の面影はない。最後の大松といわれた南側鳥居外がわの松が枯れてから十年近い。

然しこの境内に「黒松」「合松」「赤松」が二十数株生き残っており、天然に芽立ち自生した最後のものと思われる。小岱松の名声があまりにも高いので、自然生の幼松は全然見当らないのである。

この生残りの二十株に「小岱松」の特長を備えた松が「黒松」「赤松」各一樹宛見られる。「黒」は神殿北側後方に「目通一メートル」で樹高は二十メートル近い荒皮性の松であり「赤」は北側の通用参道の脇に在り曲りくねった老松である。

その他に最大のものは目通「一メートル六十センチ」あり「合いの松」で当町では最大の松であろう。

尚、航送船々着場の松三株は、この地附近から移植した松である。

十一、六栄地区のシイノキ

六栄地区それも赤田、鷺の巣から向野にかけて「シイノキ」が多いが、このブナ系の常緑樹は松に押えられてあまり目立たなかった。松の自滅により勢付いている様である。

「シイ」の実は「ドングリ」などと違い「アク抜き」をしなくても食べられることは「六十才」以上の方は経験しているし、古代人に取っては重要な蛋白源であった。

町北部の高地からところ／＼に「シイ」の大木があり丘陵の最先端に当る。

長洲町向野六〇〇一、山本家綱氏宅にそびえる「大シイノキ」は

根 廻 五メートル三十センチ

目 通 双幹体、東幹、三メートル、西幹、三メートル四

〇

東幹は枯れて西幹だけ息づいている、全家にはこの他にも数株の大木がある。

大字宮野字中尾（鷺の巣の古い墓地）の北端にある大木は
目 通 三メートル三五センチ、（樹高一メートルの点か

ら双幹になっている。）



向野山本氏のシイノキ

東幹 一メートル六四センチ

西幹 一メートル三七センチ

樹高 約二十メートル

他を圧してそびえ立っている。

十二、清源寺長樂と白花ヤブツバキ

1、清源寺長樂

肥後椿の古種に「清源寺長樂」(白長樂とも云う)と云う白花椿がある。

註、長樂、という品種があるが前者より後で作られた別種である。

「清源寺」とは肥後国玉名郡腹赤村の一部落でこの部族から種苗を得た、故に「清源寺長樂」と名付けられたと物の本にある。

古老の云い伝えによると同部落の正福寺にこの椿の原木があり、経一尺に余る大木であつたが明治六年同寺大火災の折焼失したと云い、又一説には博多の豪家に引取られたともいう。

この椿が熊本の好事家の手により栽培増殖されて、その名と共に現在まで伝えられている。長洲町の地名を冠した植物はこの「清源寺長樂」があるのみで貴重な存在である。

幸いにも

長洲町大字腹赤八六五、池本憲夫氏方にこの椿が保存伝承されている。

樹種 ツバキ、(ツバキ科ツバキ属)

肥後ツバキ清源寺長楽

目通 四十六センチメートル

樹高 三メートル

それほどの大木ではないが相当の古木である(さし木やつぎ木の穂木として所望が多くて「枝先」を切り取られるので樹勢を殺がれ成長しないものと思われる。)

2、白花ヤブツバキ

椿は日本と中国に原種があり、中国のものは昆明(中国南西部)附近が原産地と云われ葉が長大で「つや」が少なく花は大きめである。日本原産のものは葉に「つや」が強く、それが「津葉木」となり春の花の意で「椿」と云う文字が作られた。椿の実は「食用」となり又「薬用」となり「つばき油」として女性の化粧の必需品となり、日本人の生活上の重要な役割を果たしてきた。現在も「大島つばき」に代表される「天然整髪用」としてその需要は多い。

長洲町の古い海岸線即ち梅田、高浜から六栄南部立野折崎にかけて椿の木が非常に多い。特に旧六栄地区の中に、南部には植栽木か自然木か判らないが多くの椿が生えている。

第九章 植物
元来「ツバキ」は赤花であるが、この地域では白花の「ヤブツバキ」が点在しており、葉の形状は日本種である。「ツバキ」の花の改良は室町文化に始まると云われ、「ツバキ」の道をたどることにより「室町文化」の系統が判る、ともいわれている。この「白ツバキ」が改良されて「清源寺長楽」となったものか自然発生

したものか興味深い。

長洲町大字折崎字赤崎―吉野浦の雑木林の中に数株の「白ツバキ」があり、最大のものは根廻り「一メートル二六センチ」である。これと同種のものが、長洲町大字折崎字折地、丸山十一氏宅の「生垣」に在り最大のものは枯れているが、二株が残っており花つきは良好である。

参考事項 長洲町大字宮野七六六、城戸生二氏方

樹種、ツバキ、肥後椿、花種は羽衣

があり「五幹立ち」で根廻りは「二メートル」近い古木である。

惜しむらくは「ヤブ」状となつて他の樹木が覆い茂っている為に樹勢が押えられている。

その他にも立野、向野に肥後椿の古木（赤花）がある。

註 この項は椿研究で知られる。長洲町新山の「高橋治雄氏」の研究と所説による所が多い

十三、清台寺と西光寺の銀杏

清台寺にある銀杏三樹は創建時（元禄年間）に植えられたと伝えられる。目通は二メートル台で、その大ききよりも古銀杏の木にしか見られない「乳イチョウ」となっている。

註 「乳イチョウ」とは樹肉が垂れ下がりちようど「鐘乳石」の様な状態を呈することを云う。ここの他は「県指定」の四王子神社の古銀杏に見られる。

この寺の本堂前の植込みに石碑があり「華道の道に副う云々文化元年」とあり、この寺の庭園跡と見られる。

西光寺の納骨堂前の大銀杏は樹容壮大な姿の太木であり目通しは四メートルに近い。
樹勢が強く若木の様に生い茂っている。この寺の前庭は古い「ソテツ」があり「エノキ」太木もあり何れも創建時（慶安年間）からのものと伝えられている。

十四、腹赤天満宮鎮守の森

所在地 長洲町大字腹赤天満宮境内

所有者 腹赤天満宮

樹種 イチョウ、イチョウ科、メス木

一、目通 三メートル四二センチ

根廻 四メートル三十センチ

樹高 二十メートル

二、目通 三メートル四十センチ

根廻 四メートル一五センチ

樹高 二十メートル前後

三 樹種 クスノキ、クスノキ科クスノキ属

目通 三メートル

根廻 四メートル五十センチ

樹高 二十メートル

右三樹の他に「エノキ」銀杏など目通し二メートル以上の老木があり、鎮守の森らしい樹林を形成している。

十五、折地天満宮隣りの大榎

所在地 長洲町大字折崎字折地

所有者 古沢芳喜

樹種 サカキ、ツバキ科サカキ属

常緑広葉小高木で関東地方以南に自生する、神事に用いる木、古来神木として神に供せられ、材は細工物に使用する。

根 廻 三メートル三十センチ

樹 高 七メートル

株立状となっており幾世代を経た古木である。古沢家はこの天満宮の社守りであり全社と地続きの隣家でもある。

神社と切り離してこの樹は考えられない。古老の云い伝えによると、社内に在ったものを移し植えて庭の主木としていつくしんだものと云う。

尚「サカキ」は害虫が寄生しやすい樹である為、健康管理に注意を要する樹であり、この樹も処々に虫害

が見られる。

稀に見る榊の太木であり貴重なものである。

十六、長洲町のソテツ

樹種 ソテツ、ソテツ科ソテツ属

常緑裸子植物、高さ十五メートルに達する、雌雄異株、九州南部、沖縄・中国の亜熱帯地方に自生する。

この樹は系統上シダ植物と種子植物をつなぐ植物として注目されている。

所在地 長洲町大字梅田 嶋田 喜

〃 〃 宮野 城戸生二

〃 〃 腹赤 中尾リツ

〃 〃 長洲 四王子神社

〃 〃 〃 旧公民館跡

等々、この町の旧家の庭園跡には「蘇鉄」が残されており前記の箇所以外にもこれらに劣らない太木がある。

梅田の嶋田氏のソテツは「享保年間」に住家の改築と造園の時植えられたとの口伝が残されている。

長洲町の庭園構成上重要な意味があるものと思われる、庭園はその地方の文化をはかる尺度とも云われており研究課題である。



有明の森と松並木 新熊本百景選定記念碑



清里小学校の庭



姫ヶ浦防潮堤と防風林



清源寺長楽（肥後椿）



四王子神社の銀杏

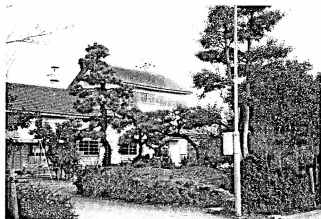


古塘の清正公エノキ

名石神社の銀杏（落雷の傷跡）



長洲小学校の大エノキ



旧本陣、馬場邸跡の庭園

むすび

以上長洲町の植物に就いて述べたが、何等植物学の知識もなく、「一町民としての植物観を」とのことで筆をすすめたものの意あつて筆足らず、特に本町を地理的に分類してその植物帯の比較検討に主眼をおきたかつたが力及ばず心残りである。

○ 大、古木についてもまだ塩屋の天満宮にも幹廻り、三、五〇米、の榎があり、それに次ぐ榎と銀杏があり、平原の厳島神社にも銀杏の雌雄二株あり雄木は三、五一米、雌木は二、四〇米、の目通があり雄大な姿をしていたが六十年の十三号台風で枝折れ、その上白蟻の被害を受けて下枝のほとんどを切り取られている。又清源寺天満宮に目通三、六〇米の銀杏巨木が二樹及櫻の古木がある。

○ 同部落の高台に在る「馬場ワサ」氏宅の裏の昆沙門堂跡の榎は「幕末に移植」したと口伝のある大樹で他を圧してそびえている。そして赤田、鷺の巢方面については調査不充分的為記載洩れが多いと思われる。

○ 長洲町に於ける大木古木はその大部分が神社仏閣の敷地内か公共の施設内であり、私有地に在るのは稀である。これは公による保護か又は信仰の対象に守られて数百年の齢を保ち得たものの様である。

○ 自然林でない新山の松林、姫ヶ浦の松並木が生き残っているのは、松

山の松が絶滅した現在ではせめてもの慰めである。

○ 私企業である日立造船と清里小学校は性格は異なるものの環境緑化に対する熱意には敬服の他はない。

○ 長洲町の旧馬場氏の庭園は明治以前に造られた貴重な庭園であったが、町民の公共施設として再生することでもあり、惜しかったがやむを得ない。

○ 六栄小学校の櫺のように、百年に満たない年月で一人の善意ある行いが周辺地域の「心のふるさと」にも成り得るのである。

○ 「緑の長洲町」を標望して「町の木」「町の花」も定められた。地球的規模に於て緑の重要さが論じられている時、次の世代によりよい長洲町を残さなければと念ずる次第である。